

抗体医学の泰斗が解き明かす

身を守るために知っておきたい 新型コロナウイルスの知識

新型コロナウイルスは世界の21世紀の医学・医療が直面したパンデミックとなった。史上初めて、リアルタイムにウイルスの遺伝子型と検疫反応がモニターされ、ゲノム疫学と、mRNAワクチンが用いられつつある。ところが我が国では遺伝子工学、計測科学、情報科学の知識が活かされず、社会的対応でも極めて問題が多いまま1万人を超える方が犠牲となる未曾有の災厄となりつつある。

このウイルスは変異しつつ波を描いて感染を拡大してきている。波のたびに新しい配列のウイルスが急増し、自壊することを理解するのが大事である。そして波のたび幹となるウイルス集団が増大している。社会の中の無症状の感染者の増大を抑えることが正念場であり、感染者数が増大すると一定の割合が免疫暴走で重症化し、医療危機を迎える。

そこで今回の講演では次の3点を、日本政府のコロナ対応において科学のリーダーシップが機能しない中で、東大と世田谷区との連携での成果を踏まえ、社会人として知っておくべき知識をまとめたい。

第一は、変異とそれへの免疫反応の理解である。波の生まれるメカニズムを説明する。

第二は、PCR検査について、その原理、自動化、カットオフ、変異の対応の正確な理解である。これにより高齢者施設、病院、学校の検査を可能にした世田谷区の当事者主権の取り組みを紹介する。

第三は、ワクチンの液性免疫と細胞性免疫を通じた効果の理解である。短期的には細胞性免疫で変異株にもかなりの効果が期待されるが、長期的には効果の薄れる可能性も考える必要がある。

精密医療と、当事者主権という今後の日本の医療の方向性を見据えて、考えていきたい。（講師談）

講師

東京大学先端科学技術研究センター がん・代謝プロジェクトリーダー
東京大学名誉教授



児玉 龍彦 氏

(こだま たつひこ 氏)

【略歴】

昭和52年 3月 東京大学医学部医学科卒業
昭和52年 6月 東京大学医学部付属病院内科研修医
昭和59年 9月 東京大学医学博士
昭和59年10月 東京大学医学部第三内科助手
昭和60年 5月 マサチューセッツ工科大学生物学部研究員
平成元年12月 東京大学医学部第三内科助手
平成8年 4月～30年3月 東京大学先端科学技術研究センター 教授
平成23年 4月～29年3月 東京大学アイソトープ総合センター長 兼任
平成30年 4月～ 東京大学先端科学技術研究センター
がん・代謝プロジェクトリーダー
東京大学名誉教授

日時

2021年**5月13**日(木) 19:00～20:30

視聴

本講演会は、オンラインビデオ会議ツールZoomウェビナーを使用したライブ配信のWEB講演会です。視聴するには、Zoomに事前登録が必要になります。まずはお申込みフォームから参加申込のお手続きをお願いいたします。申込受付後に別途事前登録のご案内を差し上げます。

対象

医師、歯科医師、医療スタッフ（事前申込制）

参加費無料

※QRコードからのお申込みができない場合は、お電話でも受付いたします。

お申込みはこちら



<https://bit.ly/3tcSnsq>

QRコードをスマホ等で読み取って必要事項を入力のうえお申込みください。

主催：一般社団法人熊本県保険医協会

TEL : 096-385-3330 FAX : 096-385-6448 Email : kumamoto-hok@doc-net.or.jp